

## 持田遺跡出土の石製装身具及び玉作関係資料 9点

稲村 繁  
(横須賀市自然・人文博物館)

所在地 逗子市逗子5丁目2番地16号  
所有者 逗子市

持田遺跡(神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳 逗子市No.18 遺跡)は逗子市桜山5丁目に所在し、田越川左岸の標高25~40mを測る丘陵北斜面の台地上に立地する。昭和45(1970)年から4次にわたる発掘調査により多数の竪穴式住居跡とともに、土器・石器・青銅器など多量の遺物が出土した弥生時代中期から古代にわたる大規模な集落遺跡である。

なかでも弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては、東海や北陸系の土器を出土する三浦半島北西部における拠点集落のひとつであったことが注目される。また、出土した古墳時代前期に属する石製装身具及び玉作関係資料類は特筆すべき資料である。

### 資料の概要[計測値における( )内の数字は現存規模]

#### ○石製装身具

##### 1 石釧(L区出土:報告書実測図第47図石釧・図版61-2)

淡緑灰色細粒凝灰岩製。上端の一部わずかに欠損するがほぼ完形。直径8.0cmの正円形。環体幅1.0~1.1cm、厚さ(高さ)1.8cm、内孔径上5.9cm・下6.1cm、重さ70.3g。精巧品。斜面彫刻は低い山形に削り出した23条の突線を放射状に残し、突線の頂部と、突線と突線との谷底部に刻線を施している。外面下部には幅0.55cmを測る1条の凹帯が巡る。石材には径0.1mm程の硬質の黒褐色粒子がわずかに含まれる。また、底面の一部には原石の摂理面にみられる霧状の黒褐色に変色した部分が認められる。

##### 2 大形管玉(W区Bトレンチ2区4層出土:報告書実測図第47図ニ・図版63-1)

淡緑褐色細粒凝灰岩製。大形で太い。外面の一部に後世の傷あるがほぼ完形。長さ7.05cm、小口径上1.58×1.6・下1.64×1.66cm、体部最大径1.66cm、口径上0.4・下0.4×0.45cm、重さ35.2g。わずかに中膨らみ。両側穿孔。石材には斜方向の薄い堆積層が確認できる。

##### 3 管玉(L区第5トレンチ2区採集:報告書実測図第47図イ・図版63-1)

硬質淡緑色細粒凝灰岩製。片端一部欠損。長さ1.77cm、小口径0.8cm、入孔径0.2cm、出孔径0.1cm、重さ(1.8)g。片側穿孔。石質は1・2に比べ緻密で硬い。

##### 4 管玉(L区第4トレンチ3区付近採集:報告書実測図第47図ロ・図版63-1)

硬質暗緑色細粒凝灰岩製。一端欠損、他端一部欠損。長さ(2.24)cm、小口径(0.6)cm、入孔径(0.2)cm、出孔径(0.2)cm、重さ(1.2)g。片側穿孔。石質は1・2に比べ緻密で硬い。

##### 5 勾玉(W区採集:報告書実測図第47図い・図版63-1)

緑褐色蛇紋岩製。完形。断面楕円形。全体に細かい擦痕。長さ2.5cm、頭部最大径0.7

×0.9cm、入孔径0.18cm、出孔径0.18cm、重さ2.9g。片側穿孔。透明感のある良質な石材。

6 勾玉(W区採集：報告書実測図第47図ろ・図版63-1)

乳緑褐色蛇紋岩製。完形。断面やや扁平な楕円形。長さ1.72cm、頭部最大径0.3×0.6cm、入孔径0.2cm、出孔径0.2cm、重さ0.8g。片側穿孔。黒褐色の斑点を含む良質な石材。

7 勾玉(W区J3区2層出土：報告書実測図第47図は・図版63-1)

褐色滑石製。尾部先端欠損。断面楕円形。長さ(0.53)cm、頭部最大径0.4×0.65cm、入孔径0.2cm、出孔径0.2cm、重さ(0.8)g。片側穿孔。

○玉作関係資料

8 管玉未成品(U区旧2トレンチ2区付近採集：報告書実測図第47図ホ・図版63-1)

硬質淡青緑色細粒凝灰岩製。両端を欠損する。長さ(3.85)cm、側面幅1.32~1.58cm、入孔径(0.3)cm、出孔径(0.2)cm、重さ(10.7)g。四角柱の四隅の角を取る側面打裂段階の未成品であるが、すでに片側穿孔による貫通孔がみられる。欠損した入孔側の小口面の端部に、穿孔前調整と思われる擦痕がみられる。いずれの面にも研磨は認められないことから、側面打裂段階で両端が破損したものと思われる。3に類似した緻密で硬い良質の石材。

9 石片(W区E・2-3層出土：報告書図版63-1)

明青緑色細粒凝灰岩製。長さ2.03cm、幅1.67cm、厚さ1.1cm、重さ4.9g。一側面に白色の自然面がみられることから、原石から四角柱を割り出す形割段階の荒割剥片の可能性が高い。石質は8に比べ粗粒で、1・2に類似する。

## 考古学的所見

石釧は玉作遺跡である海老名市本郷遺跡から製作過程の欠損品が出土しているものの、製品としては神奈川県内唯一の出土例である。また、太い大形管玉も川崎市加瀬白山古墳北粘土塚、横浜市日吉観音松古墳・稲荷前1号墳・東野台2号墳、三浦市大浦山洞穴、逗子市地蔵山遺跡など県内での類例は極めて少ない。石釧の形態的特徴や太い大形管玉の盛行時期などから、ともに古墳時代前期後半の製作と考えられる。この時期両者は首長の威儀具の一種としておもに古墳への副葬用に製作されている。そのため玉作遺跡などから未成品や破損品は出土するものの、集落から完形の製品が出土することはほとんどない。したがって両者は古墳への副葬を前提に持ち込まれたか、あるいは特別な祭祀用品として保持されていた可能性などが考えられるが、いずれにしても極めて特異な例といえる。

製作地については石釧の精巧さから石製腕飾類製作の中心地であった北陸地方の可能性も考えられるが、海老名本郷遺跡からも石釧の未成品は出土している。また、太い大形管玉をみると、本遺跡例を含め地蔵山遺跡、稲荷前1号墳、東野台2号墳、日吉観音松古墳出土例は色調や石質の特徴などが海老名本郷遺跡出土の未成品に類似している。さらに、本遺跡出土石釧と同じ特徴を有する細粒緑色凝灰岩は丹沢山塊でも産出することから、小形の管玉も含め本遺跡出土の細粒緑色凝灰岩製石製品はすべて海老名本郷遺跡など近傍の玉作工房で製作された可能性も考えられる。したがって本遺跡出土の細粒緑色凝灰岩製の

装身具類は、当該期における製作地と消費地との関係を考えるうえで重要な資料といえる。

勾玉は良質の石材を使用し、小形ながら極端な扁平化がみられないことなどから古墳時代前期末葉頃と考えられる。この時期荒川上流域産の蛇紋岩・滑石を使用した玉作は産地近郊や常総地域などで盛んにおこなわれているが、県内では当該期の玉作遺跡は確認されていない。したがって勾玉に関しては遠方からの供給と考えられ、器種によって製作地が異なる可能性を示す資料といえる。

玉作関係資料とした2点は石質が異なるものの、ともに丹沢山塊産の細粒緑色凝灰岩である。管玉未成品は3・4の小形管玉同様緻密で硬く良質であるが、石片は石釧や大形管玉同様相対的に粗粒で軟らかい。未成品の破損品ながらすでに穿孔が完了しており製品として持ち込まれた可能性もあるが、石質の異なる形割段階の剥片と思われる石片の存在は、本遺跡での玉作の可能性が極めて高いことを示している。横須賀市佐原泉遺跡でも角柱形を含む数点の細粒緑色凝灰岩片が出土しているものの、明確な未成品は検出されていない。したがって本資料は、三浦半島内でも丹沢山塊産の細粒緑色凝灰岩を使い玉作をおこなっていたことを示す重要な資料ということになる。県内で細粒緑色凝灰岩を使用した玉作遺跡は伊勢原市坪ノ内・久門寺遺跡、海老名市社家宇治山遺跡、同本郷遺跡、鎌倉市宝積寺跡・天神山下城遺跡、横浜市上谷本遺跡、川崎市不動台遺跡など本遺跡を含め7遺跡が確認されているが、弥生時代終末期～古墳時代早期とされる坪ノ内・久門寺遺跡を除けばいずれも古墳時代前期後半に属している。全国的にみてもこの時期に玉作は拡散し盛行をみせることから、県内他遺跡と同時期に本遺跡も玉作をおこなっていた可能性が高い。

古墳時代の東日本に広くみられる管玉の製作工程は原石→形割→側面打裂→円柱に近づけるために砥石で荒く磨く研磨→穿孔→円柱整形→磨き上げとなり、一般的には研磨後穿孔をおこなう。しかし本遺跡出土の未成品は側面打裂段階ですでに穿孔が完了しており、全国的にみても特異な工程といえる。坪ノ内・久門寺遺跡からは新潟県産とみられる土器が出土しており、海老名本郷遺跡からは荒川上流あるいは筑波山周辺で産出する絹雲母片岩製の砥石が出土するなど、遠方の玉作集団との交流が指摘されている。玉作の技術である攻玉技法には系譜があることから、本遺跡出土の未成品にみられる特異な工程は他地域の玉作集団との交流を解明する重要な手掛かりとなる可能性も秘めている。

古墳時代前期において本遺跡は、近接する地蔵山遺跡群とともに三浦半島北西部最大規模の拠点集落を形成している。これは、同時期に築造された南西約1.5kmに位置する長柄桜山古墳群の被葬者であり、逗子湾と田越川流域を支配した首長を支えた集団の中心的集落であったことを示している。したがって、副葬用品である石釧や太い大形管玉の出土は単に特殊な例としてではなく、長柄桜山古墳群築造の背景や被葬者像を考えるうえで重要な資料となる。また、小形の管玉・勾玉については、古墳時代前期後半における関東地方内での玉類の生産と流通など、逗子市域と他地域との交流の実態解明に寄与する資料である。さらに、玉作関係資料は希少な玉作遺跡の存在を示すだけでなく、日本における攻玉技法の伝播を解明する資料としても重要である。

以上のように、持田遺跡出土の石製装身具類及び玉作関係資料は、逗子市の歴史解明に

資するばかりでなく、古墳時代前期における広汎な地域の歴史解明にも重要な役割を果たす資料と考えられる。

### 引用参考文献

- 三田史学会 1953『日吉加瀬古墳』考古学・民族学叢刊2  
 久保常晴ほか 1965『川崎市久地不動台遺跡調査概要』川崎市教育委員会  
 佐藤安平ほか 1971「横浜市緑区上谷本遺跡群発掘調査報告」『昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書(2)』  
 赤星直忠ほか 1975『持田遺跡発掘調査報告 本文篇・図録篇』逗子市文化財調査報告書6・7  
 中村勉ほか 1989『佐原泉遺跡』  
 後藤喜八郎ほか 1990『海老名本郷(VI)』  
 石川和明 1992「東野台古墳群調査報告」『調査研究集録』9(財)横浜市ふるさと歴史財団  
 赤星直忠ほか 1997『大浦山洞穴』三浦市埋蔵文化財調査報告書4  
 横浜市歴史博物館 2001『企画展 横浜の古墳と副葬品』  
 平塚市博物館 2001『夏期特別展 相模国の古墳』  
 寺村光晴編 2004『日本玉作大観』吉川弘文館  
 齊藤真一ほか 2011『社家宇治山遺跡』かながわ考古学財団調査報告 264

